

「幻滅の未来」における  
可能なラディカリズムとは何か  
森 千香子（一橋大学）

## 1. ラディカリズムが直面する課題——世界的な「右傾化」という課題

軍事大国化、天皇・家族の重視、領土問題、そして河野談話見直しといったように国家によるナショナリズムの煽動は近年、今まで以上に顕著になっている。こうした国家の施策に呼応するかのように、草の根の排外主義も跋扈している。それは2007年設立の在特会にとどまらず、社会の広範にわたって右翼（極右）運動が展開されている。2014年8月15日の靖国神社周辺一帯は、このような国家による排外主義と草の根の排外主義の接続点——つまり国家によって「承認」を受けた草の根の排外主義が、どれだけ確実に力をつけ、勢いを増しているのか——を鮮やかに示す格好の、そして実に恐ろしい舞台であった。

このようなナショナリズムや排外主義の高揚は日本に固有の現象ではない。たとえばフランスでは2012年に社会党政権が誕生した（これは一見、「右傾化」とは反対の現象にみえる）が、それ以降の右傾化の加速は著しい。三月の地方統一選挙で極右が大躍進し、五月の欧州議会選挙では極右・国民戦線が26%の得票を記録して第一党となるなど「右傾化」が問題になっている。政党政治レベルだけでなく草の根レベルでも同性婚反対デモ、「学校における歪んだジェンダー理論教育」抗議活動といった新保守主義的な草の根運動が大規模に展開されている。こうした流れを受けて既存の二大政党も反移民的な路線を強化するなど、明らかに極右支持層に配慮した政策をとるようになっていく。

フランスにかぎらず、ヨーロッパ全体でも右傾化や排外主義運動の高揚は著しい。去る七月に横浜で開かれた世界社会学会大会でも、サスキア・サッセンやリュック・ボルトンスキーをはじめとする複数の社会学者が、先進国における共通の課題——資本主義支配の深化と並行してナショナリズム／クセノフォビアが高揚するという政治的状況——として「右傾化」の深化を指摘した。「右傾化」はもはや世界的な共通課題として認識されているといっても過言ではない。

## 2. なぜ「批判」は影響力を失ったのか

本報告は、このように「右派の領域拡大」(Boltanski, Esquerre 2014)がすすみ、右派による「批判」活動・言説が顕在化する一方で、左派の「批判」活動・言説が機能していないようにみえる、という仮説にたち、その仮説と背景について検証したい。

最初に提起したいのは「基本的人権をはじめとする普遍的な価値や多様性を尊重

する意思決定という意味での〈民主主義〉がきわめて危機的＝クリティカルな状況にあるにもかかわらず、現状の変革を促すような批判＝クリティックが機能しないのはなぜか」という問いである。この問いはすでにボルタンスキーが1999年にシャペロとの共著『資本主義の新たな精神』で指摘している問いとも重なる（Boltanski, Chiapello 1999=2013）。

ただしこの問いを現代の文脈で検討するには、いくつかの補助線を引く必要がある。第一に、問題は「批判」が存在しないことでなく、その影響力にある、という点である。広い意味での「批判」は現在でも展開されており、それどころか、今までになく活発に展開されているが、それにもかかわらず、現状が全く変化しないどころか、体制の政策が推し進められているという一見逆説的な状況が存在する。渡辺治も指摘するように、2006年以降、九条の会、脱原発、反TPPの運動などが噴出し、ここ三十年来みられなかった規模で社会運動が盛り上がりを見せ、しかも高齢層、若年層、女性などそれまで運動に参加しなかったような層の動員に成功する、という現象がみられた。それにもかかわらず、こうした運動をとおして展開される「批判」が政治に反映され、社会に変革をもたらす力として機能しなかった。批判は行われているのに、それが影響力を失ってしまったかのような現状の背景を考える必要がある。

第二に、批判自体に問題が内在するという点である。これについてボルタンスキーは前掲書で「批判言説が資本主義の変化に常に遅れを取っていること」を指摘しているが（しかしその後の著作でボルタンスキーはこの見解を訂正している）、ここではむしろ対抗勢力の内部にある亀裂、分断という問題に焦点を絞りたい。

### 3. 「現実主義」という名の脱政治化に抗う

批判をおこなう左派陣営内部の分断、亀裂にもさまざまな問題があげられるが、そのひとつが「現実主義」の名のもとに、他の選択肢を一切認めない思考がある。趣意書にも触れられている都知事選における「左派・リベラル」の候補一本化の呼びかけにおいても、宇都宮支持は「理想主義」であるとして、現実主義の細川を支持するというレトリックが散見された。このような主張に抵抗する者は「現実」をわからぬ者として排除するというレトリックは、（日本だけでなくフランスの）反レイシズム運動や脱原発運動にもみられる。

もっともこのような論法は、対抗勢力陣営だけでなく体制側が用いる常套手段でもある（言い換えれば体制的な思考が皮肉なことに運動の側にも浸透しているということにもなる）。今日の安倍政権も、「（新自由主義的）改革」、「改憲」、「軍事国家化」などを唯一可能な「現実的方策」とするレトリックを多用している（たとえば9条は時代遅れとして、現実主義の立場から改憲が支持されるし、また辺野古移設の「お墨付き」を与えた仲井真弘多知事の「埋め立て承認」においても現実主義のレトリックが用いられた）。フランスでも社会党政権が2012年の選挙公約を破

《シンポジウム》  
「ラディカリズムの条件——窮迫する時代を見据えて」

って前政権の新自由主義路線を押し進めており、それに対して左派から激しい批判が起きているが、こうした批判に対して政府が反論の根拠とするのも「現実主義」である。

今日のこのような「現実主義」は、「現実はこうなのだから仕方がないのだ」として他の可能性や選択肢を一切認めない、という点できわめて非政治的な営為であり、それは脱政治化の効果をもたらす。こうした脱政治化は経済領域においてはとてもわかりやすいが、それは運動の現場にも影響を与えているように思われる。311以降の社会運動の盛り上がりのなかで運動への参加者が、しきりとその「非政治性」を前面に出すのも（趣意書にある「普通の市民」）その一例であろう。そしてこのような政治性の剥奪こそ、社会運動におけるある種の「脱政治化」こそ、「運動が盛り上がっているのに変革が起きない」、一つの理由ではないだろうか。そう考えると、「現実主義」の幻想から脱却し、批判の力を回復するには政治を社会に埋め戻すこと、つまり再政治化の作業が必要になることは確かだろう。

#### 4. 言葉をめぐる闘い

だが、一体なにかから始めればいいのか。エリック・ファッサンは近著『左派—幻滅の未来』のなかで、閉塞的な現状を乗り越えるための手がかりの一つとして「押しつけられた言語によって問題を考えること」からの脱却の重要性を説いている。現代日本社会の閉塞的な状況の中で、現状打破の手がかりを秘めた言葉として「ラディカル」を価値づけるには、言葉の再定義が必要になるだろう。色々な定義が可能であるが、その一つとして「唯一の可能性」として提示される「現実主義」の路線に対して、異なる「現実」を突きつけ、そこからの抜本的な変革を促すよう迫ることを「ラディカル」と呼ぶことの意義について本報告では議論したい。